

中國の昆布に就いて

野田光藏

中国には古来昆布の生産はなくして日本から輸入せられたのであるが、最近に至つて山東半島の膠州湾一帶にマコブ (*Laminaria japonica* ARE-SCHOU) が本格的に養殖せられ重要な海産物の1つになつたので、その来源について少しく考察を試みたいと思う。

中国の沿岸は地理的關係や従來の沿岸流から考えると、昆布の生育条件は考えられない、亦生育して居なかつた。処が1903年(明治41年)頃から大連港口の防波堤壁に発生を見るに至つた様である。隣接せる沿岸にはその幼体が漂流して来るものもあつたが當時は余り世人の注意を惹かなかつた。漸く昭和5年頃になつてその生育が確められたが、大連港は自由貿易港ではあり乍ら大連港口一帶は一般人の出入が出来なかつた事情等もあつて採食するには至らなかつた。昭和7年頃から大連にあつた関東水産試験場がその養殖に着目し、大槻洋四郎氏等がその所在地たる大連老虎灘に隣接する嶺甲湾一帶に移植を試み之に成功した。嶺甲湾一帶は泥土を含まず岩盤への着生は良好であつたので愈々有望となり、その後設立された関東水産公司によつて營業されるに至つた。1945年終戦と共に日本人營業者の引揚、亦その養殖の指導者大槻洋四郎氏も暫く大連に残留して居たが、青島の水産調査所へ留用となり大連を去つたので大連一帶に於ける昆布の養殖は中絶して了つた。

青島へ移つた大槻氏は再び膠州湾一帶に昆布の養殖に期待を持ち大連より移植を試みた。一帶は旧満洲の沿岸とは異なつて海水は泥土少なくその着生、生育は極めて良好で中華人民共和国政府は非常なる期待を寄せて居る。

中国人は昆布を海帶(hai-tai)と呼んで居る。海帶と言へば廣大なる中国の何処へ言つても通用するが、昆布では実物を眼の前にし乍らでも通じないのが普通で中国では昆布と言う名称は全く使用されて居ない。併し海帶にせよその来源を調べて見ると昆布と密接なる關係を有する。

昆布の生育地は主として北海道沿岸であり、この主産地と全く關係のない遠く距つている大連にその発生を見た事は、分布上から言えば極めて興味ある事であるがその発生、由来に就いては次の様な事實が考察せられる。

大連港口の防波堤壁に発生した事實から考えると、先ず航路と關係があ

つた様に思われる。更にその発生箇所が貨物船の停泊地である事等を総合して見ると、恐らく貨物船によつて運ばれて来たものではなからうかと考えられる点が多い。それが発生したと言う1908年頃の當時を回顧すると、恰度日露戦争が終り日本海經由の北海道小樽と大連との輸送航路が開通する様になつてからの事である。この貨物船は一旦大連港口で停泊するので北海道産昆布の胞子がこの航路の貨物船の船底なりに附着したまま運ばれたものが大連港口の堤壁に偶々着生、発生したと考える事が適切な様に考えられる。即ち昆布の生育地として例外的なものとして考えられている大連産の来源を北海道より運ばれたものと見做し得るならば問題は解決される。

その生育に就いては従来の沿岸流の知見ではその發育条件も不充分であるが、遼東半島(大連一帯)の海藻相からも、亦沿岸流の調査からも明らかである如く冬季特色があつて局部亜寒帯地区を構成し、冬季は北上して来る夏季沿岸流に代つて旅順黄金台下附近に発生する局部亜寒流発生し、山東半島角へ向つて南下する沿岸流が現出するので、昆布の発生する時季に都合よくその生育条件をもたらすものである。

遼東半島の沿岸一帯は泥土多きため自然発生は少なく僅かに黒石礁に見られ、亦旧露西亜町波止場に生育するのが見られたが、露西亜町波止場のものは比較的矮形で葉質も薄く生育は良好なものではなかつた。冬季遼東半島より山東半島角へ向つて南下する亜寒流により煙台(芝罘)港口にある一小島たる無人島に発生していた事が昭和16年頃始めて判明したのが、只今の処唯一の自然発生地であらう。

昆布の生育からも述べられる事は、遼東半島沿岸の海藻相は山東半島の沿岸と関係有し朝鮮西海岸とは余り関係は見られない。恐らく朝鮮西海岸を流れる沿岸流は遼東半島の沿岸へは達せず、亦鴨緑江の流水に遮えられて居る様に考えられる。

(新潟大學理學部生物學教室)

F R I T S C H 教 授 逝 く

“The Structure and Reproduction of the Algae”(1935, Vol. 1; 1945, Vol. 2) (藻類の構造と生殖)の著者として知られるロンドン大学名誉教授 F. E. FRITSCH 氏は昨年5月23日75歳で長逝された。1911年から1948年までロンドン大学 Queen Mary College の植物学科主任、晩年1949年から1952年まで Linnean Society の会長であつた。上記の著書は永く古典として残るべき書で、戦後第2巻の出版を知つた筆者は南加大学の DAWSON